

詞の格

第八章 詞の格

第一節 格の總説

部分の全體
に於ける立
場詞の斷句に
於ける立場

格は詞の運用の一態であつて其の詞の斷句中に於ける意義の斷續のぐはひを示すものである。例へば終止格は意義が斷絶し、連體格は體言へ連續し、連用格は用言へ連續する。簡單な説明としてはこれで要領を得て居る。しかし我々はもう少し格の本質を明にしたい。凡そ一つの成立體は或る材料から成立する。そこで凡ゆるものに於て、その成立體といふ全體を構成する各材料は全體に對して各その立場が有る。例へば戸主と家族とより構成される家に於て、戸主は家に對してその全體を代表する獨立の立場に在る。家族は家に對して全體を代表する立場には在らずして戸主に從屬する立場に在る。

詞が斷句を構成する場合もそうである。「月が出る」といふ一斷句中に於てその斷句の全體を代表し獨立の立場を占めてゐるものは「出る」である。「出る」は事件である。「月が出る」といふ事件の代表部である。「月が出る」は事件であつても「月が」は事件ではない。「月が」は

「出る」に從屬してその事件の主體を示すといふ部分的任務を果すだけで全體を代表するものではない。その立場は從屬的である。

詞が斷句を構成した場合には上述の如く各の詞皆その立場が有る。詞が離れ／＼に在る場合には立場はない。「月が出る」の「月が」は主語であるが「月が」だけ孤立してゐる場合は主語ではない。しかし他日斷句を構成したらむ場合に或る立場を占むべき資格は孤立の「月が」にも有る。孤立の「月が」の持つてゐる資格は他日主語になり得べき資格である。この資格は主格である。そこで次の如く言へる。

格の定義

格とは詞の運用の一態であつて、詞が斷句の材料として斷句中に用ゐられた場合に、從屬的立場を占めるか代表的立場を占めるか、その占むべき立場に對する資格を示すものである。

凡そ詞は一つとして斷句中に用ゐられないものは無い。故に詞は必ず皆格が無ければならない。

詞の中、名詞、動詞の二つは格が複雑である。格の問題は文法上最も重要なものであるが、名詞の格、動詞の格が特に重要である。

副詞、副體
詞、感動詞
の格

副詞、副體詞、感動詞にもそれぞれ格が有る。格がないならば斷句中には用ゐられない筈である。しかし副詞、副體詞、感動詞の格は甚だ簡單である。副詞の斷句中に於て取るべき立場は常に連用的であり、副體詞は常に連體的であり、感動詞は常に終止的である。故に副詞は唯連用格といふ一格を有し、副體詞は連體格といふ一格を有し、感動詞は唯終止格といふ一格を有するのみである。

印歐語の格

照應格

格といふ概念は西洋人が考へ出したものである。しかし、西洋では名詞(代名詞を含む)の格をのみ言つて動詞の格を言はない。それは西洋の動詞の格が貧弱なために其處まで徹底しなかつたのである。尤も西洋でも動作詞、形容詞、副體詞などが連體語となる場合に名詞の格と照應するための格は有る。例へば「白き花を愛す」の「花を」が他動格であるから「白き」もこれと照應する爲に他動格の語尾を取る。故に我々は格を區別して主要格、照應格といふ。「花を」が他動格であるのは主要格である「白き」が他動格であるのは照應格である。日本語には照應格は無い。故に我々が單に格といふのは主要格を指すのである。

名詞の格

第二節 名詞の格

名詞の表現
相

名詞の表現相

名詞はその概念の表現に關して表示態、敘述態、指示態、喚呼態の四相が有る。

表示態はあたりまへな用法であつて、單に概念を表示するだけで全く判斷力の加はつて居ない表現相である。

花を觀る

花の色

舟に乗る

月の光

の「」などがそうだ。

敘述態は名詞が動詞の様にその觀念に明確な判斷が加はつて敘述性を帯びたものである。

苦は樂の種。

酒は百藥の長。

親の物は子の物。

ならぬ勘忍するが勘忍。

の「」の類である。「種だ」「長だ」……といふ様な意である。但し「種だ」……と云へば名詞でなくて名詞性動詞である。「だ」なしに「だ」の様な意味を帯びる用法が名詞の敘述態である。

指示態

指示態は單に事物を表示するだけでなく事物を指示するものである。次の「」などがそ

うだ。

やあ、綺麗な花。

あら、大變な雪。

まあ珍しいかた。さあどうぞ。
鐵瓶をひつくりかへした。雑巾。雑巾。

これらは單に概念を表示するのみでなく、その概念の内包的意義が働いてゐる。名詞であつてもその内包に重きを置くのである。

喚呼態は對者を呼掛ける用法である。次の「」などがそうだ。

おい、自動車屋。

先生、どうぞ此方へ。

お父様、お早うございます。

旦那、どちらへ。

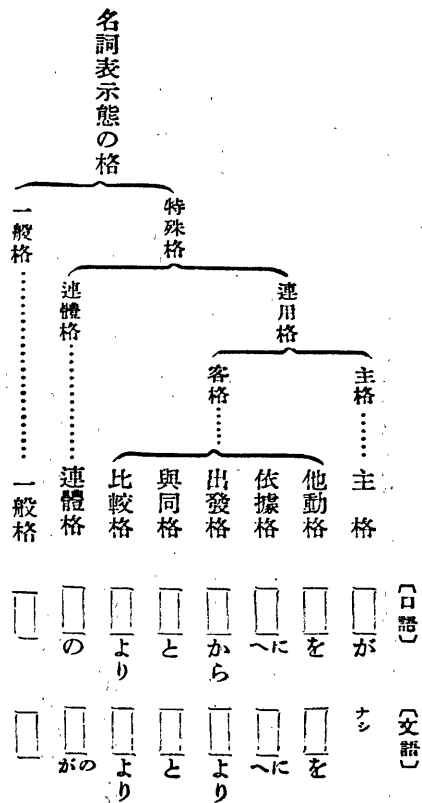
これは他人を喚呼して自己の話の對手としての意識を呼び起させようとする主觀的意義が含まれてゐる。

名詞にはこの四相がある。一口に名詞の格と云つても此の四相の其れ／＼に格が有るのである。この中表示態の格が最も精密である。他の三相の格は極めて簡單だ。

表示態の格

表示態の格

普通、名詞の格といふのは主として表示態に就いていふのである。
名詞の表示態には格が八つ有る。



右の表の「」は、無格の名詞を代示したものであるから「」の處へ何でも名詞を當てれば善い。

「」が「」は口語では主格になつてゐるが文語では連體格である。「君が來ませる」の「君が」なども主體的連體格(第二九頁)で、主格ではない。文語には主格はない。一般格を使ふ。

一般格

一般格は用法の廣い格であつて細かい區別のないものである。主格の代用にも客格の代用にも連體格の代用にも、又副詞的にもなる。例、次の「 」。

1 主格の代用

御飯まだ出來ないか。(主格は「御飯が」)

2 客格の代用

御飯食べてから出かける。(客語は「御飯を」)

3 連體格の代用

洋服裁縫處。(連體格は「洋服を」)

4 副詞的

今日歸る。十時間勉強する。三箇處照會する。

一般格は之を示す助辭がない。無格と同じ形である。便利な代りには不明確な場合がある。漢文の名詞は「之」「焉」の外は全部一般格である。

右の例の(4)の如く名詞の一般格が副詞の如く用ゐられたものは副詞と誤解され易いが、やはり名詞であつて副詞ではない。副詞は内包詞であつてその概念に外延性が無いが名詞には外延性が有る。

西洋でもこの點はよく分らないものと見えて、「私はあなたより一寸高い」などの「一寸」を副詞だとも名詞だとも云つてゐる。或は「一寸」の前へ前置詞「を」置き得るから「一寸」は名詞であるとか、或はアングロサクソン時代の語で「一寸」は依據格を用ゐたから「一寸」は名詞だとか、種々のことをいふが、要するに名詞の修用的用法といふことが分つてゐない。「一寸」の前に前置詞が有れば「一寸」は前置詞に對して客語である。「一寸」が依據格ならば勿論その「一寸」

は「高い」に對して客語である。然るに「一寸高い」の「一寸」は修用語である。「一寸」は名詞ではあるが西洋人が「一寸」を名詞だと云ふ論は理由が立たない。

依據格の「に」(第三頁)とニ活動助辭の「に」(第五頁)及び與同格の「と」(第六頁)とト活の動助辭の「と」(第二頁)とを混同してはならない。ニ活ト活の「に」と「と」の附いたものは名詞性形容詞である。

敘述態、指示態、喚呼態の格

敘述態、指
示態、喚呼
態の格

名詞の敘述態、指示態、喚呼態には唯一一般格が有るだけで他の格の格はない。一般格は用法が廣く種々に用ゐ得られるものであるが、此等諸態の一般格は多くは終止格の代りに用ゐられる。

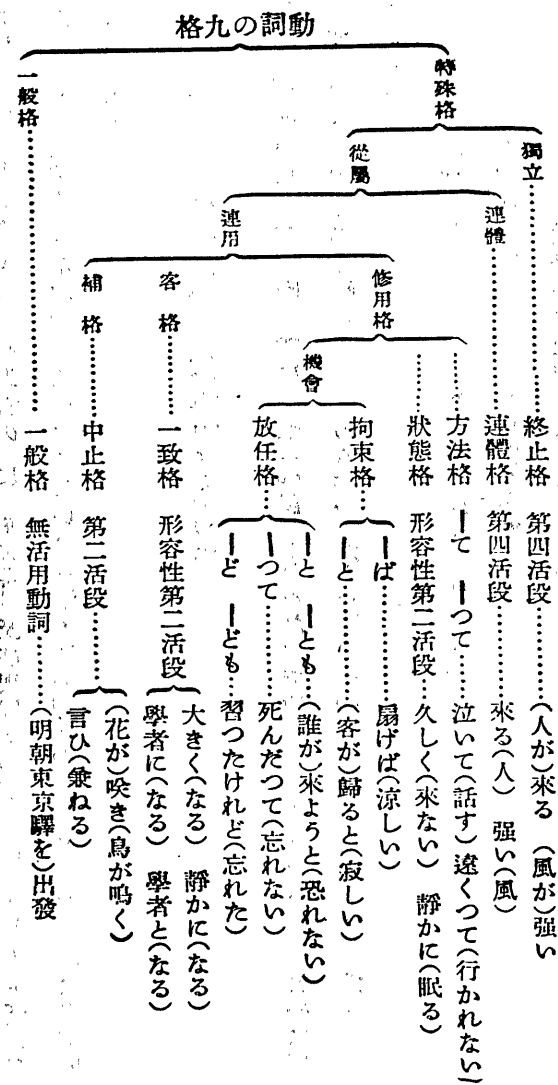
苦は樂の種。(敘述) 嘘はどうぼうの始まり。(同)

玄關へ御客様。(指示) もし貴方。(喚呼)

これらの「 」は一般格の終止的用法である。然らばなぜ終止格と云はないか。それは終止の記號がないからである。且つ稀には終止以外の用法も有るのである。

勳阿の格

第二節 動詞の格



一般格

動詞の格は活用の活段及び助辭に因つて示され、又無活用動詞はそのまゝ一般格となる。一般格は無活用動詞を、格の助辭も語尾も無しにそのまゝ用ゐるものであつて、用法が甚だ

一般格は無活用動詞を、格の助辭も語尾も無しにそのまゝ用ゐるものであつて、用法が甚だ

廣い。

無活用動詞といふ中には、本來無活用なものゝ外に、活用の或る活段を固定させて無活用化させたものもある。

一般格の用法は凡そ次の二種である。

一終止的用法 終止格と同價值に用ゐられる。例「川」。

私の弟は國語は少し善いの、數學は丸でだめ。

まあよく似てゐること。お兄さんにそつくり。

この時護國寺の鐘が微かにごーん。

二 連用的用法

①單純形式動詞の上に用ゐられて補語となる。例へば次の「　　」。

賛成する

旅行致す

泣いたり笑つたりする

天氣も惡し道も遠しする

ぐつたりする

はつきりする

2 中止格の代りになる。例「

今夜は京都へお泊り、明晩は東京へお着きになる。

君は身體は丈夫、信用は厚し、羨しいなあ。

無活用動詞の下に形式動詞が有つた場合は無活用動詞も一つの動詞、形式動詞も一つの動詞である。例へば「賛成する」は「賛成」も一動詞、「する」も一動詞である。故に二者は連詞的動詞となる。

無活用動詞の下に動助辭の「な」「だ」です「が有れば一つの有活用動詞になる。「丈夫な」「丈夫だ」「丈夫です」は何れも一動作詞である。無活用動詞の下に「活の」「に」「活の」と「が有れば一つの形容詞になる。例へば「丈夫に」「立派に」「すら／＼と」「はつきりと」は何れも一つの有活用形容詞である。

格の體言化

體言と用言

體と用

第四節 格の體言化

體言と用言

體と用とは東洋哲學に於ける觀念取扱上の範疇であつた。もと佛家に出で、儒家に入つたものである。其れを我が國の學者は言語の研究に利用した。西洋にも本體と屬性、主體と作

用等の概念は有つたが、未だ東洋に於ける體用といふ様な統一された者には至らなかつた。體は有形無形に拘らず凡ゆるものを靜止狀態に置いて考へた概念である。用は凡ゆるものを活動狀態に置いて、その物から派生すると考へられた點だけをそのもの、體から離して考へた概念である。例へば「机」といふものは靜止的に考へれば机そのものであつて體である。書を読み字を書くの用に堪へるといふ、机の我々に與へる價值能力は机の用である。故に體は實體であつて用は運用である。

言語も體用の二面から觀察される。古人は體の言、用の言など、云つたが、そう明確な考ではなかつたらしい。後語尾の活用の研究が起つて活用しない語を體言と云ひ、活用する語を用言と稱する傾向を生じた。權田直助、落合父子の如きがそうだ。更に又西洋文典の品詞別から、名詞代名詞を體言とし、動詞形容詞を用言とする人も出た。故大槻博士などがそうだ。

東洋哲學に於ける體用の概念はそんな約らないものではなかつた筈である。體用といふ價值ある語がそんな約らない役目に用ゐられるのは言語の死用といふべきである。古人は體用といふ語を有意義に用ゐ始めたが、大成しない内に邪路に迷ひこんだのである。活用の

體用二字の
死用

有無ならば活用語、非活用語でも有活用語、無活用語でも善い。名詞、動詞の別ならば名詞動詞で善い。雞を殺すに牛刀を用ゐると牛を殺す時に差支へる。

ものを其の運用から離れて其の自體だけを一物として考へたのが體である。ものをそれ身體から離れてその運用だけを考へたのが用である。

言語に就いて言へばその言語が實際へ用ゐられる場合は人はその運用を主として考へるから用である。用を主として考へられた言語は用言である。例へば人を呼んで「來い」と云へばそれは命令を表す爲の實用の語であつて命令は言語の用であり、「來い」は用言である。又「今日は日曜か」と問はれて「いや月曜」と考へたとすれば、その「月曜」は答であつて答へることは言語の用であり、その「日曜」は用言である。

言語が實用に供せられて居る居ないに拘らず言語の或る部分が、一つの實質として指示されたものを表す場合はその指示の對象は體でありその語は體言である。例へば「舟に乗る」に就いて言へば「舟」は用言であるが「舟」だけ考へれば體言である。又「舟には乗らない」に就いて言へば「舟」は用言である。「は」に由つて指示された「舟」は體言である。前の「舟に」と違ふ。又「舟に乗りはしない」の「舟に乗りは」は用言であるが「は」に由つて指示さ

れた「舟に乗り」は體言である。

されば體言用言の別は同じ語でも用法に由つて變るので、彼の活用の有無や品詞別の如きものではない。古人が體の言、用の言と云つたのはこういうことが言ひたかつたのであらうと思ふ。

無格を體とし有格を用とする。

私は何品詞に拘らず無格なものを體言といひ有格なものを用言といふ。無格とは「山」「川」などの様に用法のまだ定まらないもの、有格とは「山へ」「川を」などの如く用法づけられたものである。然らば體言用言と云はなくても有格語無格語と云へば善い様であるが、そう行かない。何となれば有格のものも一つの物の如く取扱へば無格の如くなる。「山への便り」「河をば渡らず」などの「山へ」「河を」は「山へ」といふもの、「河へ」といふもの、如く取り扱はれてゐる。この場合の「山へ」「河を」はこゝでは體言である。これは「有格の無格化したもの」などと云ふよりは直に體言といふ方が便利である。私は體言といふ語をこういう風に有意義に有價値に使ひたいと思ふ。

拙著女子標準日本文法に體言用言と云つたのはそんな難しい理論の上に用ゐたのではない。世俗の通り名詞代名詞を體言とし動詞形容詞を用言としたのである、これも行く／＼は體言用言と云はない様にしたものである。

體言動詞

體言動詞

體言動詞の格には主格、出發格、比較格、依據格等有る。

主格

1 友だちを訪ねたが不在だった。

2 友だちを訪ねた所が不在だった。

右の例の(1)「」は體言動詞であつて、「が」が附いた「」は主格であり、下の「」に對して主語である。(2)の「」も同様であるが、これは名詞である。(1)の「」も(2)の「」も何れもその事の場合(機會)を表す主語である。

友だちを訪ねた場合が友だちが不在の場合であつた。

の意である。こういう主語は人間の思想に於てのみ主體概念として取扱はれた所の概念を表すものである。之を主觀的主語といふ。

主觀的主語

勘當した以上は博打を打たうがお前の達手、どろぼうをしようが此方の知つたことではない、病まうが死なうが掛り合なした。
 面白いふ悪い遊はしないが善い。

出發格

右の「」は假定を表す體言動詞で「が」が附いて主格である。

郊外は水道が無いから水が不便だ。

あの料理屋は女將が死ぬからけちが附き出した。

右の「」は體言動詞であつて「から」が附いて出發格となり、下の「」に對して客語である。

比較格

酒をやめる方が煙草をやめるより容易だ。

右の「」は體言動詞で、「より」が附いて比較格である。

金を儲けるには三かくでなければだめだ。

汽車へ乗るに時間を考へずに飛び出す奴が有るか。

醫者が云ふに彼の人の病氣は中々重いさうだ。

日があたつてゐるのに雨が降る。

随分怠けたのに及第した。

右の「」は體言動詞で「に」が附いて依據格である。最後の二例の「に」の上の「の」は形式動詞(第三頁)である。「」の全體は連詞的體言動詞である。

以上に挙げた體言動詞は皆有活用動詞の第四活段が無活用化された體言である。事物を表すのではないから名詞ではないが、名詞の様に主格、出發格、比較格、依據格等になる。

連用格の體言化

連用格の體言化

名詞はもと體言であるが、それが格を帯びると用言化する。例へば「人」は體言だが、「人と爭ふ」の「人と」は連用格で用言である。

連用格は名詞にも動詞にも副詞にも有る。例へば、「人と」は名詞の連用格、「歸つて」は動詞の連用格、「暫く」は副詞の連用格である。

そうして凡べての連用格(用言)は次の「 」の如く體言化することが有る。

人との爭

東京への歸り

外國からの電報

東京へ歸つての翌日

高山としての富士山

宜しいとの御一言

その祝盃は成功したらゝの事だ

東京での金持

火事での損害

日本に於ての高山

暫くの間

以上は(1)の「 」は名詞の連用格、(2)の「 」は動詞の連用格、(3)の「 」は名詞性動詞の連用格、(4)の「 」は副詞の連用格で、何れも體言化してゐる。なぜ體言化するか、それは恰も一つの物の如く一つの實質として考へられるからである。そうして下へ「 」が附いて連體格になつてゐる。

終止格の體言化

終止格の體言化

終止格の語は本來用言である。しかし之を一つの物の如く見て一實質として取扱へば體言化する。その體言化したものは次の「 」の如く名詞となることも有る。

損になるか得になるかを考へて見よ。

人物の善い惡いが第一だ。資格の有る無いは第二だ。

しかし次の「 」様に名詞とならず、體言動詞として形式動詞の補語になる場合が有る。

1 道も遠し天氣も惡しする。

道も遠いし天氣も惡いしする。

補語

雨が降つたり雪が降つたりする。

あの店は親父もぐつだし息子もぐつだしして發展はとても望まれない。

2 親父也使ふ息子也使ふしてとう／＼家を潰してしまつた。

右の(1)の「」は第三活段不十分終止格で(2)の「」は普通の終止格であるが、何れも體言化して下の「する」「して」に對して補語となつてゐる。

連用格の提示

連用格の提示

各詞の連用格は本來用言である。一般格も同様である。

舟に乗る 泣いて話す 早く来る 今日行く

の「」の類皆用言である。然るにその下へ提示助辭が附いて

舟には乗る 泣いても話す 早くさへ来れば 今日でも行けば

などの「」の如くなることがある。之を連用格の提示態といふ。

しかし提示態は提示助辭が附いて始めて提示されるのではない。實は提示助辭の附く様な時は提示助辭の附かない前に格が提示されてゐるので、提示助辭は唯その提示を詳密にす

るだけである。例へば「學校へ這入る」「學校へ這入らない」の「學校へ」は平説であつて提示されず即ち用言であるが

僕、あんな學校 決して這入らない

の「あんな學校」は單説であつて平説ではない。即ち提示されてゐる。名詞の一般格の提示である。

僕、あんな學校へ、決して這入らない

と連用格に云つても大抵ならば「」が提示されてゐる。これは依據格の提示である。下へ「は」が附けばその提示が詳しくなるだけである。「は」などがなくても提示ではある。

連用語は用言であり、その提示されたものも用言である。しかし連用語が提示されるにはその前に一度體言となる。何となれば提示は用であるが提示の對象は體である。連用語といふ用言は體言化した上で提示されて再び用言化するのである。

第五節 格の含蓄態

格の含蓄態

終止格はその用言たる用法に在つては必ず意義が終止獨立する。一般格の終止的用法も同

様である。

他の諸格は皆從屬格であつて意義が終止せずに下の語へ從屬する。一般格の從屬的用法も同様である。

然るに從屬格及び一般格の從屬的用法も、自己の當然表すべき概念以外に他の觀念を含蓄しその含蓄した部分に由つて意味が終止する場合がよく有る。例へば客を迎へて「さあどうぞ」などといふことが有る。「どうぞ」は副詞であり副詞は常に連用格であるから意義が終止しない筈であるが、「さあどうぞ」の中に「お上り下さい」といふ様な觀念が含まれるから、その含まれた「お上り下さい」といふ命令的意義に由つて意義が終止する。これを格の含蓄態といふ。含蓄態は終止格と同様の効果を以て斷句の代表部になる。これは決して省略ではない。音の省略といふことは有るが文法上には言語の省略といふことは無い。所謂省略とは含蓄といふことの俗解である。

言語の省略
といふもの
は無い

標準 日本口語法 終

昭和五年二月十五日印刷
昭和五年二月二十日發行

標準日本口語法



著 者 松 下 大 三 郎

發 行 者 中 村 時 之 助
東京市牛込區新大塚一七四番地

印 刷 者 福 井 安 久 太
東京市芝區山崎五十一番地

印 刷 所 安 久 社 印 刷 所
東京市芝區新橋區森口角

定價金參圓五拾錢

□□□

發行所

東京市牛込區
新大塚一七四番地

中文館書店

電話牛込三三二五番
振替東京三八四二七番

□□□

□□□

廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	廣島高等師範學校教授 文學士 鈴木敏也先生著	東京高等師範學校教授 文學士 垣内松三先生著
概觀日本文學史潮	室町文學選集	江戸文學選集	明治文學選集	國語教授原論
版四	版新	版八	版十	版新
菊判全一冊洋綴 定價金四〇圓 送料金拾八錢	四六判全二冊洋綴 紙數三三〇頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢	四六判全二冊洋綴 紙數四五〇頁 定價金參圓貳拾錢 送料金拾八錢	四六判全二冊洋綴 紙數三五〇頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢	菊判全一冊洋綴 紙數五〇〇頁 定價金壹圓參拾錢 送料金拾八錢
我が邦二千年餘の文學史を、最にも詳細に、組織的の精華を、依りて、評す、文學史の第一、一位を占むべきを、確證す。	當時の文學史を、掲げ、次に室町前期、中期、後期、二百六十年間の、各種文學の、代表的傑作を、擇集す。	江戸文學史の概略を、敘し、同時代の、代表的作品、小説、俳句、淨瑠璃、川柳、歌、俳句、狂歌、當世の、批評、を、加へたる、批判、適當なる、研究の、一、大、道、場である。	本書は、明治文學史の、概略を、敘し、其、時代の、傑作、を、加へたる、批判、を、加へたる、研究の、一、大、道、場である。	國語教授の、技術、や、方法、論を、基礎として、先づ、研究の、實用、に、取り、次ぎ、に、文學、の、研究、の、好著。

東京女子高等師範 學校教授 文學士 佐伯常應先生著	東京高等師範學校講師 芝野六助先生著	東京高等師範學校講師 芝野六助先生著	前東京女子高等 師範學校訓導 土屋敏雄先生著	成城小學校訓導 奥野庄太郎先生著
女子作文新編	國語讀本批判的解釋 一學年用	國語讀本批判的解釋 二學年用	最新國語便覽	學習室文庫
版新	版三	版再	版新	版新
菊判全一冊洋綴 紙數五〇〇頁 定價金壹圓參拾錢 送料金拾八錢	菊判全一冊洋綴 紙數三四〇頁 定價金貳圓七拾錢 送料金拾八錢	菊判全一冊洋綴 紙數四三〇頁 定價金參圓三拾錢 送料金拾八錢	三六判全二冊洋綴 紙數四五〇頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢	一六判全四冊洋綴 紙數五〇〇頁 定價金四圓貳拾錢 送料金拾八錢
作例を、諸大家に、引用し、學習に、取り、次ぎ、に、文學、の、研究、の、好著。	教育界に、於て、種々、と、論議せられ、つゝ、ある、尋常小學校、國語、教授の、根柢、を、本書に、依つて、完全、に、培養、する、出來る、點、に、關し、研究、である。	小學、國語、讀本、教授、上、の、根柢、を、確立、する、事、本、書に、若くは、なく、最も、新、なる、研究、として、の、と、信ず。	國語、一切に、涉り、兒童、の、最も、誤謬、多き、ものに、就て、一字、一語、忠實、に、其、の、資料、を、調査、せし、もので、ある。	世界の、著名なる、兒童、文學、は、勿論、科學、地理、逸話、傳記、等に、涉り、弘く、紹介、す。クラサイ、ブラリー、として、好適。

成城小學校訓導 奧野 庄太郎先生著	東西幼年童話新選 尋常一・二・三年程度 菊の巻 楓の巻	版新	各卷全一冊宛 總クロス洋綴 紙數各五百頁 定價金二圓宛 送料各貳拾七錢	本童話選集は純粹に子供の爲の童話です。 御家庭に必ず御そなへを願ひます。
成城小學校訓導 奧野 庄太郎先生著	東西童話新選 尋常四・五・六年程度 地の巻 天の巻	版新	各卷全一冊宛 總クロス洋綴 紙數各五百頁 定價金二圓宛 送料各貳拾七錢	子供の爲に書かれたグリムやアンデルセン其外面白い童話を子供の爲にやさしく書いた良書。
成城小學校訓導 奧野 庄太郎先生著	各科學習室文庫 日本地理物語	版新	全三十冊箱入 定價金二圓 送料金貳拾七錢	飾る本でなく、眞箇に讀む本、而も價至廉。一學級何十人でも一時に讀める。
平山美佐男先生著	國語教育 漢字短句讀本	版新	菊判全一冊 定價金五拾錢 送料金六錢	徴(ヒカスガ)徴風徴徴にそよぐの如き面白き短句約二千を蒐む、音訓讀法の學習書。